

岐阜町、未来へのバトン



株式会社 岐阜まち家守
代表取締役社長
山本 慎一郎さん

金華山の西麓に位置する旧「岐阜町」。かつて織田信長公がそれまでの「井の口」という地名を「岐阜」に改めたこと由来する歴史あるまちです。この地の歴史と生活文化を未来へ繋ぐべく、令和三年十月、市民出資のまちづくり会社「株式会社 岐阜まち家守」が誕生しました。このまちの風景を、百年後まで変わらず残していきたい、という願いのもと、舵取りを担う代表取締役社長、山本慎一郎さんの取り組みの根底にある、まちを想つ、温かく、かつ揺るぎない想いを伺いました。

失われていく風景を前に

「岐阜町という町名は実在しませんが、私たちはこの一帯を、誇りをもってそう呼んでいます」
山本さんは、この地で百五十年続く油屋「山本佐太郎商店」の四代目。岐阜町で生まれ、育ち、暮らす中、ごく自然に、まちの彩をまちの仲間とともに守っていききたい、という想いが育まれていきました。
そんな山本さんのもとには、日々、町の困りごとが届くように。その中でも特に空き家の相談が数多く寄せられるようになっていきました。

「はじめは一住民としての善意で、貸したい人と借りたい人を繋いでいたものの、町の風景が急速に失われていく現状をひしひしと感じ、危機感に苛まれていきました。十年後には住民の三分の二が六十五歳以上になると言われています。このまま空き家が増えていくならば、なんとかせねば、と強く思うようになりました」
今、誰かが守らなければ。
この信念のもと、山本さんは、まちの空き家を負の遺産とせず、まちの資産として生かせないかと、その仕組みを模索し始めました。

「仕組みができれば、まちは壊れないに違いない」

マルシェから始まった循環

山本さんはまず、まちが持つ力を引き出そうと、種まきを始めた。その一つが、岐阜善光寺の市「大門まるけ」を発展させたマルシェ「ミライの参道まるけ」です。「まるけ」とは、フランス語の「マルシェ（市場）」と、岐阜弁で「くまみれ」「くだらけ」を意味する言葉を掛け合わせた名称です。
「この取り組みは、約十一年前の善光寺御開帳を機に、前任職と有志が中心となり、お参りの楽しみの一つとして始まりました。前任職の奥様が当初より運営に関わり、

現在は株式会社岐阜まち家守の事務局を務めるとともに大門まるけおよびミライの参道まるけの取りまとめを担ってくれています」
舞台となった伊奈波の参道は、昭和の頃には商店が軒を連ね、人々が行き交う生活の動線でもありました。回を重ねるごとに来場者が増え、次第に地域の方々も関わる場へと広がり、まるけはコミュニティの拠点の一つとなっていきました。

その後、岐阜まち家守の設立を契機に、「まるけ」を境内から参道エリアへと拡大。ミライの参道まるけを開催し、客層を広げるとともに、まちの可能性を試す、テストマーケティングの場としての役

割も担っています。

近年では医療系団体と連携し、「嚥下食」を扱う店舗が並び、高齢化が進む地域においても世代を越えて同じ場を共有できる取り組みが生まれるなど、マルシェを通じて人の集まる力が、可視化されていきました。

「岐阜らしさ」を投資する

「岐阜まち家守」の役割は、単なる不動産仲介ではありません。山本さんはその物件を含む、まちの風土ごと次代へ手渡すための、まちへの投資だと考えています。
「私たちは物件を買い受け、投資して手を入れ、その価値を理解してくれるオーナーさんにバトンを渡します。単に仲介するだけでなく、自らが投資を施すことで、これまで当たり前に行われてきたこのまちの風景や文化、伝統の形を整え、確かな姿で未来へ繋いでいく。それがいちばんの役割だと思っています」

これまでに手掛けた案件は約三十件。なかでも二十年以上も寿司屋が途絶えていた「御鯨街道」の变化は象徴的です。通称だけが残っていたこの地に、山本さんの呼びかけやマルシェをきっかけに三軒

の寿司店が集まりました。再び暖簾が揺れる風景が、まちにゆとりと戻りつつあります。

山本さんが何より大切にしているのは、この街が持つ「らしさ」です。「最近では街の賑わいを見て、雰囲気自分が合っている、と相談に来てくださるケースも増えていきます。先日ある出店者の方から、守ってもらっている感覚がある、という言葉をいただきました。とても嬉しくて印象に残っています」その「守られている感覚」の意味を、山本さんはこう捉えます。

「山が見える景色や寺社の多さも理由ですが、何より大きいのは『人』だと思っています。この街には古くから商売を続けてきた方々が多く住んでいます。彼らがこのまちの新しい挑戦者たちを温かく応援してくれる。そんな地域の皆さんの懐の深さが、今の街の安心感を作り出し、この街の『らしさ』を形作っているのではないのでしょうか」
そして、それが、このまちの矜持だと話します。

さらに、山本さんの視線は、岐阜町という枠組みだけに留まらず、目指しているのは、岐阜市のまちなか全体の「岐阜らしい」発展です。「岐阜駅から柳ヶ瀬、伊奈波界限、岐阜公園、そして川原町。これら点

在する魅力的な拠点を、歴史や文化という見えない糸で結ぶだけでなく、経済の循環としての、キャッシュポイントとして繋いでいきたい。地域一体となって魅力を高めることで岐阜らしく活性化させたのです」

一つのエリアが潤うだけでなく、岐阜市全体が健やかに巡り始める。それを動かすのは、やはり各々の地域を想う「人」だと。そんな大きな循環を描くことも、次世代へバトンを渡す家守としての、大切な使命だと考えています。

街の呼吸に寄り添って

「岐阜まち家守は、特別なことをしているわけではないと思います。

ただ、このまちを大切にしたいと思う人たちの想いを形にしているだけだと思います。ただ、形に出来るか出来ないかは大変重要ですが、今、どの地域でも同様に必要なことではないでしょうか」
山本さんはまちの明りを大切に守りたい。そのために今何が出来るか、常に心に留めています。
「わたしたちが受け継ぐと決めた、まちを持続させていくというバトンを、どう次へ渡すか、どうしたらしっかりと次へ渡せるか、ちゃんと考えていきたいのです」
山本さんの挑戦は、まだまだはじまったばかり。

このまちと、まちを愛する人たちとともに、明日を、そして百年後を想い、歩み続けます。



株式会社 岐阜まち家守
住所 岐阜市鞠屋町 31
TEL/FAX 058-201-5680

